

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367
振替 〇〇一〇〇一 九一五八四三二 労金 東京労金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6カ月前納料

〈もくじ〉

■巻頭言

日本労働運動誕生から百年 伊勢 太郎 …………… 2

日鉄矯正会をして「国鉄闘争」

国家改造、官僚機構の有効活用が「省庁再編」の軸 滝野 忠 …………… 3

―行革会議「中間整理」と討議資料―

橋本政権と保・保連合 政権研究班 …………… 6

日本共産党はどこへゆく …………… 8

本当のたたかいはこれから 佐野 周二 …………… 11

―「頑張れ国労・新得交流会」の報告―

森の時代 蛇信仰からユダヤ・キリスト教へ 播磨 宏 …………… 12

―社会発展史、方向転換のために(五)―

読者からのおたより …………… 15 編集部だより …………… 5

「社会通信二〇周年の集い」

十一月一日(土) 午後一時 場所 東京・全水道会館

旬刊 社会通信

NO. 680

一九九七年九月二一日号

一九九七年九月二一日発行
(毎月一日・二日・二二日三回発行)

日本労働運動誕生から百年

日鉄矯正会として「国鉄闘争」

今年は近代的労働運動誕生から百年にあたる。一八九七年（明治三〇年）七月はじめ、アメリカに出稼ぎしAFL（アメリカ労働総同盟）会長ゴッパースから指導を受けた高野房太郎は、「労働組合期成会」を結成した。「期成会」の設立趣意書はこう訴えている。

「労働者は産業の振興の爲自己独立の爲、尙た内地雑居後の事を慮りてこれを講ずべき要あるに拘わらず、未だ其れを講ずべき機関の設置にあらず、又同業相知り相親み相益し相助け相交わるの組合にあらざるは、実に遺憾千万の至りというべし。以て労働組合期成会は其等の欠を補いて兼て将来の發達を欲して労働組合設立の急務を天下に呼号す。天下有志の士よ、期成会が抱負するところの趣意を賛し而して共に与に其の成立に助力あれ」

ちなみに機関紙「労働世界」の編集者は片山潜。期成会の積極的な協力者は伯爵日野資秀、東京毎日新聞社長島田三郎、社会主義研究会会長村井知至らであった。

近代日本の労働運動は一八九八年二月の日本鉄道機関方の罷工（ストライキ）で幕を開ける。ストライキに先立ち「待遇期成大同盟」が機関方によってつくられ、一八九七年二月、次の趣旨の檄文がひそかに配布された。

「勤而再拜血涙を呑んで諸君に激す。凡そ義務ある処には権利あり、責任の重大には名誉必ず之に従わざるなし、而して爰に不道理にも之に反するものあり、我等すなわち之なり。諺に物平を得ざれば鳴ると、我等の不道理の下に立ち平を得ず、勢ひ鳴らざるを得ず、否正義のために大いに鳴らざるを得ず。我等機関方の責任重大なる今更言迄もなし。

然るに会社の我等機関方に対する頗る冷遇なり、何そ不道理の甚だしきや。すでに機関方たるも下等待遇たり、其の機関方とならんには八九年の星霜をへて甫めて得たる堂々たる文明機械の技手なり。然るに運輸の一方を見よ。昨今の教習上かりの白面生一朝電信手の故を以て助役たり、駅長たり、而して直ちに中等待遇なり。」

檄文はさらに具体的な方策をこう展開する。

「目下尚有形上の運動は成り立つ能わず。心中同盟の好時節なり。而して運動の手始めとして明治三二年二月一五日迄機関方一同臨時上級の事を比書翰御一覧の上必ず式銭郵券を奮発し、課長宛に匿名を以て何百数を不限東西南北より上願すること。次は待遇改名の件、機関方を機関手に、心得を機関手心得に、火夫を乗組機関生に、掃除夫を機関生とする事、如何人となれば、機関方は運転技手たり、機関手の方当然の事なり」

これに驚愕した日鉄当局は二名を首謀者とし、同調者と合わせ十名を解雇処分にした。この処分をきっかけに福島機関庫を中心に四百名が罷工（ストライキ）に立ち上がり、二月二六日以降、上野・青森間全線の機関車を止めた。世論は機関方に味方し、四週間にわたる団体交渉の結果、待遇改善、職名改称、増給（賃上げ）の要求が容れられ勝利した。その勝利後、機関方は労働組合Ⅱ日鉄矯正会を組織。近代的労働運動の黎明をつけるのである。百年後の現在、日本労働運動の機関手となった国鉄労働組合は、労働者の未来を開くため、十年余にわたる「国鉄闘争」をたたかいつづけている。

奇しくも百年後の今日、「国鉄闘争」は新たな段階に入った。今も昔も労働運動は鉄道労働者によってルールが敷かれるということであろうか。

（伊勢 太郎）

国家改造、官僚機構の有効活用が「省庁再編」の軸

— 行革会議「中間整理」と討議資料 —

行革会議「中間整理」(五月一日発表)にもとづき、行革会議は一八日から四日間おこなう集中審議の「討議資料」を公表した。資料は「行革の理念と目標」、「省庁再編」、「内閣機能の強化」、「垂直的減量(アウトソーシング)」を巡る問題点の四つである。

ポイントは、①行革でどんな「国のかたち」をつくるのか、②それが「省庁再編」——二〇省庁を半減し、危機に備える機能的な編成とし、③危機管理に対処するため内閣機能Ⅱ首相権限を強化するというものだ。「討議資料」は「中間整理」の具体化である。したがって「討議資料」の理解には、「中間整理」の特徴を再度押さえ直すことが重要だ。

中曽根第二臨調で危機は進化

「中間整理」はどのような特徴をもっているのか。四つの特徴がある。第一は、中曽根第二臨調との違いだ。第二臨調第一次答申(一九八一年七月一〇日)は、理念として①変化への対応、②簡素化・効率化、③信頼性の確保、さらに目的として①行政のあり方を大きく改めることを通じて国全体の歩みを変える、②国際社会に積極的に貢献しえる国家、③増税なき財政再建、④活力ある福祉社会の構築をあげていた。第二臨調時、国民を幻惑させたのは「増税なき財政再建」の御伽噺(おとぎばなし)だった。これはものの見事に破綻した。しかし今や政府広報紙と化した商業ジャーナリズムは政府系諸機関の情報をタレ流すだけで、国民に必要な情報はいっさい伝えない。だから「中間整理」が財政問題について、「国民負担をこれ以上増やさない」に修正し、支配階級が今では幻想をふりまく余裕すらないことにもいっさいふれようとしない。「行革推進には行政のみならず、国民自身の意識改革、自己責任原則確立」(『中間整理』七ページ)だけが強調される。

二つは「金融パニック」の脅威は具体的かつ現実的との問題意識から、「金融システムの安定」、「金融恐慌は絶対回避」が予想をこえるトーンで強調されていることだ。「中間整理」では、「金融システム改革に伴い万一金融恐慌が生じた時は、政治があらゆる方策を動員して対応し、パニックを起こさせないことが必要」(同八ページ)と述べる。この背景に想像を絶する不良債権の累積と同時に、「ドル暴落」(アメリカン・バブルの崩壊)への不安が金融関係者に重くのしかかっていることが想像される。

三つは「不安の拡大」(同五ページ)と「危機管理」(全編を貫く基調)の強調だ。この中心に「日本の安全保障の確立、日米安保の強化、PKFの承認」(同二三ページ)がおかれ、省庁再編の要となる内閣府(仮称)の設置は、「危機管理」への対応そのものだ。

四つは、国家権力の再編成、つまり国家改造計画が、「今回の行政改革は、『わが国の具体的な姿勢を訴える意味をもつ』(同六ページ)と理念で述べていることだ。沖縄「特措法」はその一環にすぎないことはだれもが知っていることだ。

背後に民間政治臨調のカゲ

第二の大きな特徴は行革会議の背後に、「昭和維新」を呼号した昭和研究会の歴史的伝

統を継承する政治改革推進協議会の亡霊がうごめいていることだ。この時代の人物群はすべてあの世にいる。しかし、その魂は不思議なことに呼吸している。というのは、行革会議「中間整理」の結論は昭和研究会の企図を受け継ぐ民間政治臨調の「政治改革大綱」の引き写し。民間政治臨調は社会経済生産性本部（旧日本生産性本部と旧社会経済国民会議が自民党分裂・下野で一九九四年四月一日急遽統合、細川・小沢政権の有力な支持組織たることを表明）を母体に「政・財・官・労・学・マスコミ」を統合する大政翼賛、国民総動員体制をウラで組織する団体で、徳川幕藩体制にたとえれば大目付、亀井正夫なる人物はさしづめ鳥井耀蔵に相当する。

「政治改革大綱」は、①小選挙区制導入による政治改革、②中央行政機構、地方分権改革、③国会・地方議会改革を主張する。第一は細川連立政権下で実行され、第二項は橋本「改革」（「中間整理」）そのものだ。それに深く密着するのが、社会保障・財政「改革」で、それらが経済構造・金融システム「改革」に連動するとの構図だ。そして、「仕上げ」として憲法改悪がジャーナリズムを「総動員」しておこなわれることになる。

旧来、自民党内部に設置されていた「憲法調査会」が、自民そして新進・民主・太陽の旧自民勢力と影響下にある衆院議員三九〇名ちかくで、次期国会に建議されようとしていることにも明らかだ。

国家権力の再編・強化

第三の大きな特徴は「中間整理」そのものだ。すでに述べたことにも明らかだが、特徴は次の諸点にある。

一つは、すでに述べたが、国家権力の再編・強化がその中心にすえられていることだ。

二つは、行革の「プラス・イメージ」（世論対策）づくりの目玉として、「郵政の民営化、少なくとも外庁化（エージェンシー）」（同十一ページ、二十一ページ）の導入が意図されていることだ。中曽根第二臨調第三次答申は「三公社改革」、とりわけ国鉄民営・分割で世論をまどわし、「総評・社会党ブロックつぶし」へと突き進んだ。「アンパン総理」橋本は、第二臨調の人脈群から知恵をさずかり、そのイメージよと二匹めのどぜうを狙う作戦だ。郵政民営化について絶対に知っていたかねばならないことがある。日本の郵政は諸外国の郵政とまったく違うということだ。諸外国の郵政はポスト（郵便・江戸時代でいえば飛脚だ。ヤマトがクロネコ、日本通運がカンガルーをトレードマークにしているのに佐川が飛脚にしていることにも示される）、しかし日本の郵政はポストはむろんバンク、保険に最大の特徴がある。

バンクとは郵便貯金、とりわけ定額貯金で、その総額は個人資産の三〇%超の二二〇兆円。さらに簡易保険の一〇〇兆円超を加えれば、三〇〇兆円をはるかに超える世界最大のバンクだ。世界最大のバンク第一勧銀の預金総額は四五兆円、東京三菱で五〇兆円、さらに世界最大の生保会社日本生命は二八兆円、「日本バンク」の巨大さだ。

銀行、証券、保険といった金融業界は三百兆をはるかに超える「日本バンク」の分け前になんとしても預かりたいのだ。「日本バンク」の一〇〇兆円政府の手から放れ、たとえ利子率二%の運用でも、業界全体で二兆円もの「儲け」にありつける。

それに比し、政府は民営化を呼号しながら引き受け手が無いのは林野だ。森・木材の資本回転率はヒノキヤスギ、カラマツで五〇年、ブナ・ナラの広葉樹なら一〇〇年かかる。

規制緩和でデリバティブというバクチ稼業に血眼になっている時、いったいだれが「おれ買うよ」というのだろうか。だから、郵政の「外庁化」「エージェンシー化」はあれ、林野のソレはないというのが、資本家階級の意見だ。

四つは「行革」は国民に「痛み」をもたらさずにはおかないことだ。かのアンパン氏すらそれを告白している。行革・規制緩和でとりわけ深刻な犠牲をこうむるのが「需給調整」撤廃の対象にされる交通、運輸、港湾、流通、卸・小売関係だ。港湾関係組織はかつての「日雇労働、追い通し（二四時間一徹勤務）、ノーチャブ（食事抜き勤務）、かみかみ（飯食いながらの勤務）再来を許さない」とストライキに突入、さらに次なるたたかいに備えている。

しかし、その他の組合では「需給調整」後に視点を移し、口では規制緩和反対！を唱えるものの、組合員減少後の事態に見合う組織体制へと布陣している。前稿に述べた「たたく前に負けている」とはまさにこのことで、自民党は労組はむろん、現状では旧自民のお友だちの新進、民主、太陽、そしてあるかないか分からないさきがけを傘下に納めるのは必至の勢いだ。

高級官僚は手厚く保護

「中間整理」の問題点でなにがなんでも指摘しなければならないのは、「国家公務員」とはだれを指すのか、キャリアか一般公務員なのかだ。

地方公務員は仕事の増大で増えている。しかし、国家公務員は「定員法」で減り続けている。大蔵省の「落ちこぼれ」の大学教員は「国家公務員全員を首切ったって二兆円削減にすぎず、今の国家財政赤字解消にはほど遠い」とのたまわれる。大蔵官僚の意識を反映した発言だ。

くり返すが、自民党政治家や財界の官僚観は、「官僚、とりわけ中央のキャリアは日本最大のシンク・タンク」というものだ。「中間整理」の二七ページに「(官僚の) 定年制、退官後の取り扱い」にこういう一節がある。「天下り防止や修士、博士の採用等のため、定年の延期（六五〜七〇歳前後）、定年時退官の原則化」、「次官及び局長は、退官後五年間内閣補佐官に任命し、総理と内閣補佐を担当」と。

それは総務庁がとつじよ、次官ポストの定年を六二歳と発表、いつの間にか決定したかのようなのであるのに、「アンパン総理」は、「ぼくは知らないよ。ぼくは六五歳とっているのだから」との言葉にも示される。橋本「行革」とはこういうものなのだ。（滝野 忠）

◇ 編集部だより ◇

▽夏休み、有効活用できましたか。海外に旅行された方もけっして少なくないのでは。

▽小生は考えるところがあってマルクスの古典を読み始めました。二十数年ぶりに読み返す論文も少なくありません。実に面白い。多少は成長したからでしょうか。

▽『旬刊社会通信』の総目次ができました。「通信二〇周年の集い」で資料・配布します。

二〇年の歳月はたいへんなものですね。六・八ポ・B5三段組で六〇頁にも達します。

▽「二〇周年の集い」は十一月一日（土）午後一時。場所は東京・全水道会館です。

「集い」の持ち方等についてお知恵を拝借できれば幸いです。「通信」の読者紹介も。

橋本政権と保・保連合

権力争いの最大のものは、政治権力の集中する首相の座だが、今回は政権政党・自民党の総裁選挙が無競争のため、九月八日の告示を待たず橋本現首相の続投が事実上確定した。これで特別の事故や汚職のない限り、今後さらに二年間は橋本政府が続くわけで、橋本政府は働く人達の立場、生きる諸条件をいよいよ悪化させているだけに、もう二年もと思っただけでも「ゾー」とする。もちろんそうさせないために、勤労国民の生活と権利を守るための運動をねばり強く押し進めなければならないことはいうまでもない。運動もせず、だめなものだめという意思表示をしなければ、保守政治や資本主義自由経済の「悪業」は限りなく拡大し進展する。そこで橋本政権と保守政治勢力の最近の動向を見ることにしよう。

保・保連合とは何か

保守政治勢力が総体として事実上の意思統一、または理念としていっているものは、新保守主義による国内政治の統一であり、そのための政治経済構造の再編・強化である。これによって日本の大企業・多国籍企業が世界に進出して勝ち残れるようにしようというのである。まさに現代における「帝国主義」である。巨大な帝国主義国アメリカに軍事的には従属しながら、経済的には競争する立場である。農業についてはアメリカの進出にまかせ、日本農業が一部を除いて破綻してもやむをえないというわけである。海外進出での競争に勝ち抜くためには、国内産業の大合理化の強引な実施である。そのための政治的課題は、規制緩和であり行政改革である。

これらの方向はいうまでもなく財界・大企業の要求でありめざすところである。昨年の総選挙後、豊田経団連会長（トヨタ自動車の会長）が橋本首相に出した「規制の緩和・撤廃等に関する要望」（九十六年十月二十八日）は十七分野・六九九件という全面的なもので、これを見ると日本の財界の意図することが充分にわかる。

この「規制緩和・撤廃」を完全に実行すればどうなるか、勤労国民にとっては地獄であり、大企業・多国籍企業にとっては極楽であろう。勤労者はもちろん一般国民にとっても働き方、生活の仕方が変わらざるをえない。労基法は改悪され、女性はパート中心で深夜も働くことになり、農作物には価格支持制度があったがこれも撤廃される。失業、倒産はあたり前となる。

それでは、自民党・保守政治勢力はこのようなことが国民の抵抗なく推進できると考えているだろうか。自民党の支持層は広い。規制緩和によって切り捨てられる農民、中小企業、自営業などは当然反発して自民党離れとなる可能性が大である。族議員といわれる国會議員のかなりの部分はこれら各層の代表でもある。当然内部矛盾が激化する。矛盾を激化させないために規制緩和・行革をゆっくりやろうというのが自民党議員の大勢である。その点社民党とさきがけは利用されている。社民・さの両党を与党としていることのプラズ面は数（議席）だけではなく、勤労国民の不満を中和する役割をになっている。しかし、社民とさきがけには百害あって一利なし、である。

例えば、この度のガイドライン（日米防衛協力のための指針）の見直し問題についても、「憲法の枠の中」とか「社民党が与党から抜けると最悪の保・保連合（連立内閣）ができる、などという理屈で日米安保条約（軍事同盟）の強化拡大を認めようとしている。国民に、憲法学者の土井党首が大丈夫というなら反対する必要があるという心理的影響を与えている。自民党は来年の参院選まで社民党の利用価値があると考えている。マス・コミの騒ぐ保・保連合の可能性は当分はないといえる。小沢新進党の内部がガタガタであり、ガイドラインや行革では個々に野党（新進、民主など）とも政策的連合ができるようになっており、閣僚を与えてまでの保・保連合の必要を認めてはいない。保・保連合を騒がせてるねらいは、社民・さきがけを繋ぎ止めておく手段でもある。

保・保連合派といわれる中曽根元首相や梶山官房長官等のねらいは「改憲」であることは間違いなく。しかしそう簡単にねらいが実現されるとは考えてはいない。改憲勢力の拡大強化、すなわち改憲派閥の広い結集である。新進党の小沢派も温存しなければならぬ。新進党はもともと政権をとるために結成された政党である。しかし現在は総選挙での敗北以来、政権への展望がなく離党が相ついでいる。解体過程に入ったともいえる状態である。それで助け船を出したのが、保・保連合の連立政権論である。将来は政権への可能性があるということ、旧公明党系と旧民社系の引き止めができ、小沢党首の首も繋がったというわけである。しかし参議院選後はあぶない。保守勢力の中は出世主義と権力主義が横行している。

自民党内派閥の再編・復活

自民党タカ派は改憲を展望して、勢力の結集を始めたことも事実である。これをバックアップするのが読売新聞の渡辺社長などのマス・コミのタカ派である。しかし、そう順調とはいえないようだ。八月二十三日に旗揚げした「日本の心と活力をたかめる会」は、この日を設立発起人会としたが、実際は集まる議員数が小さいことから総会とは名乗れなかったという。出席した国会議員は三十一人（衆・参で）に過ぎなかった。その原因は次のことであろう。

①橋本内閣の改造に近いので入閣を期待している議員は参加していない。

②次の首相をねらっている加藤幹事長の方にも顔を立てるため、秘書などを代理に出席させている（代理三十人）。保・保派には強力な求心力をもつ「ボス」はいないこと。中曽根氏では古過ぎるのと清冽さがなく、といわれる。次の総理をねらうよい玉が保・保派にはいないことだ。

③自民党内には反小沢グループがかなり存在している。かつて脱党した小沢を助けるようなことには賛成できない。

④保・保結集までではないが「改憲」には賛成できない。宮沢元首相のような護憲（解釈改憲）でよいではないか、という議員もかなりいること。

⑤次の総選挙で勝つためには、タカ派の印象はマイナスであること。

橋本行革は一応の進展は見えるものの、「小さい政府」は大きく後退している。高級官僚、ことに大蔵省と橋本首相とのユチャクは今なお続いていることを「大蔵改革」は示している。むしろ行政改革会議（二十日）の省庁再編成案は、防衛庁は省昇格とか、首相権力の拡大などによって、中央集権は一層強まることになろう。

（政権研究班）

日本共産党はどこへゆく

九月末に第二一回党大会

今、共産党が元氣よい。「自共対決」が日本政治の軸、「党と国民との関係が新たな質的段階に入った」、「二一世紀の早い時期に政権をにやうる党へ成長することをめざす」、あるいは「二一世紀の早い時期に民主連合政府を実現」といったようである。共産党は九六年総選挙を「第一の波」、さきの都議選での躍進を「第二の波」と呼び、来る九八年参院選を「第三の波」にするため、九月二日から五日間、第二一回大会を開く。結党から七五年、「史上最高の峰」に到達したと氣負う共産党は①躍進の原因をどうとらえ、②どのように第二の「自共対決」時代に備え、③どんな日本をめざそうとしているのか。七月末の中央委総会で採択された「第二一回大会決議案」を中心に考えてみたい。

「決議案」は『しんぶん赤旗』四ページ。『赤旗』では連日、解説と「読了運動」が展開されている。それでも大会までに読了する党員は必ずしも多くはないようだから、本誌の読者で「決議案」をお読みの方は少ないだろう。「決議案」の「目次」を掲げておく。

「第一章 日本共産党の歴史的躍進と、二十一世紀にむけた展望 ①日本共産党の躍進と「自共対決」の時代／②「総自民党化」政治のもとでの日本共産党への共感のひろがり／③反動・反共攻勢とのたたかい―党の政治路線の勝利／④国民との新たな関係、国民の新たな期待にこたえる活動を

第二章 日本共産党はどんな日本をめざすのか ⑤日本の政治方向の三つの根本的転換を／⑥日米安保条約をなくし、アジアと世界の平和に貢献する日本／⑦「ルールなき資本主義」をただし、国民生活最優先の経済発展を／⑧憲法改悪を阻止し、民主主義が花開く、人間尊重の日本へ／⑨民主的改革の国民的多数派の結集を

第三章 世界の動きと日本共産党の立場 ⑩アメリカ覇権主義の横暴と矛盾／⑪世界の資本主義経済の新たな矛盾のひろがり／⑫国際的な交流と連帯の発展をめざして

第四章 国政と地方政治でのさらなる躍進をめざして ⑬国政選挙の躍進をめざす活動と国会闘争について／⑭地方自治体にたいする活動の抜本的強化と選挙戦での躍進

第五章 あらゆる分野・地域で、多数派結集をめざす党活動 ⑮情勢の認識と活動の構え、学習・教育について／⑯「支部が主役」―個性が輝く人間集団めざして／⑰大衆運動―新たな変化を視野に入れ大胆な運動のひろがり／⑱機関紙拡大と党員拡大―とくに若い世代の革新的結集／⑲社会進歩と国民への重大な責任を自覚して」

選挙は前進、党員、「赤旗」は伸び悩み

労働戦線再編成、その結果としてのユニオン「連合」結成を契機に日本の政治戦線はすっかり再編されてしまった。一九九〇年代初頭まで全国政党の姿・形をもっていた社会党、民社党は消滅し、今では全国政党としてあるのは自民党と共産党の二党だけとなった。共産党の党勢は現在どのようなものだろうか。

党員は三五万人（九四年七月の第二〇回大会時）、「しんぶん赤旗」五〇万、「赤旗日曜版」二〇〇万部。党の専従者は地方機関三三三、県四七で約三〇〇〇名。これに中央委員

会と『赤旗』で約一〇〇〇名、あわせ四〇〇〇名。さらに、かつて「細胞」と呼ばれていた現「支部」は二万六〇〇〇、このうち経営支部が約六〇％である。

議会勢力は参議院一四、衆議院二六だが、地方議員総数は七月末で四〇二二議席（占有率は六・一九％、空白議会议比率は三一・九八％）と自民党をも上回るこの党の「もっともすすんだ、強い部分」である。

党財政は九四年度で収入は三二九・九億円。その八八・四％が『しんぶん赤旗』を中心とする事業収入で、党費収入は四・二％（一三・七億円）を占めるだけである。

『赤旗』に「〇〇年ぶりに入党者を迎え入れた」「『赤旗』を拡大した」との記事が目につくようになった。しかし、共産党の「躍進」ぶりには党勢拡大が「たちおくられている」ようで、当面の目的として、①今世紀中に「得票の一割の黨員、半数の読者」達成（この目標が達成されれば二倍の黨員、一・五倍の読者となる。ちなみに衆院選での共産党の得票は七二六万票であった）、②すべての支部が新しい黨員を迎えて党大会に臨むこと（第二〇回大会以降、七月の中央委員会までに新入党者を迎えた支部は約四割）を訴えている。さらに、活動の中心層は「安保闘争世代」で、若者をどうつかむかが「一番大きな課題」である。

オール与党化、政治不信

共産党がなぜ躍進し、「史上最高の峰」に到達したのか。「決議案」はその原因を「『総自民党化』政治ともいべき政界の構造がつけられていくことに根ざした変化」、「党の政治路線の勝利」を強調し、商業ジャーナリズムは「政治のバブル」を指摘する。筆者の考えるところを記す。

第一の原因は「オール与党化」した政治状況化、さきに見たように自民に次ぐ全国政党を維持したことだ。一九八〇年代から一九九〇年代初頭の「現存社会主義体制」の動揺・混乱期を乗り切ったことである。その「精神的、思想的支柱」を宮本賢治氏に負っているだろうことは、組織にかかわる者すべてが考えることであろう。

第二の原因は「新党運動」の破綻による政治不信の高まりである。永田町（国会の所在地）は権力の中枢だ。国会議員に「信念」がないことをドタバタ劇は天下に示した。投票したい政党、政治家がいなくなった。

「無党派」層の三つのタイプ

第三の原因は、その結果「有権者の政治離れ」、「支持なし層」が激増したことである。「政党離れ」、「支持なし層」拡大については分析が必要だ。その手法は二つである。

まず「組織された有権者」、そして「組織されていない有権者」の動向を調べること、次に「無党派」、「支持なし層」のタイプの分析である。とりわけ重要なのが「組織された有権者」の動向である。というのは一九八九年に「山を動かした」三点セット＋αから始まり、その後「第二の黒船」規制緩和は、金融大独占資本の利益をストレートに表現し、「柔構造」的特徴をもつ旧保守政治の支持基盤を根底から揺り動かさずにはいないからだ。このことは、従来の「革新票」の動向にも当てはまる。

次に「無党派」、「支持なし層」の動向だ。「無党派」層の時代別推移は、一九七〇年代まで一〇％台、一九七〇年代初頭二〇％台、一九八〇年代末三五％となり、九〇年代初頭に激増、九四年一月には五〇％を超え、現在は四五―五〇％である。

「無党派」の政治への関心度はどうか。「政治に無関心」二〇%で、どんなことがあっても「行かない」層。次に「関心はある」二五%で、時の政治動向に反応し、「自民制」の枠組みを支えてきた。今、強調しなければならないのは「政党支持を捨てた・捨てさせられた」無党派層一五%である。

社会党、民社党は消えてしまった。自民党も「弱い」立場に牙を次から次へと向けていく。こうして今、従来の「組織された有権者」に大きな変化が起きている。「政党支持を捨てた」有権者の政治意識は高く、「棄権」を忌み嫌う傾向が強い。この層が九六年衆院選、都議選、そして全国の地方自治体選挙で共産党に票を投じ始めたのである。彼らはかつて自民党にオキユウをすえる意味で社会党に投票したというようである。

「山が動いた」一九八九年から九一年、社会党は党勢拡大に失敗した。「総評・社会党」ブロックの伝統が、「連合・社会党」ブロックに変質したことによって、社会党が有権者をひきつけてきた政策を次から次へと投げ捨ててしまったからである。

投票する党がない？

第四の原因は、こうして「保守政治に批判的」な有権者は投票する政党が共産党しかないようになってしまったことである。「政治に関心はおおいにある」、「入れる政党がない」、しかし「棄権はしたくない」層が、「しかたないから共産に入れた」が、今の共産党「躍進」のカゲの力であろう。これを「バブル」といえばいえないことはない。実力以上に集票しているからだ。ちょうど土井社会党委員長時代の社会党がそうであったようにである。

「ふつつ」の党と「三つの根本的転換」

共産党は「第三の波」をおこせるのだろうか。今度の大会の課題は「さらなる躍進の波をどう起こすか」、「二十一世紀に向けて日本政治の革新的転換をどう切り開くか」であり、そのメインが「決議案」の第二章（目次参照）である。

共産党への「追い風」はすでに述べたことに明らかのように、いましばらく続くであろう。この「風」を党勢拡大、「二十一世紀の早い時期に政権をにやいうる党へ成長すること」、「二十一世紀の早い時期に民主連合政府を実現すること」が「決議案」を貫く糸だ。

党勢拡大への基本は「無党派層は全体として党と立場を共有できる」、「（今後の躍進いかに）政権の問題を展望できる」、「『自共対決』が日本の政治対決の主軸。政治路線上の対決だけでなく、現実の政治的力量的うえでの対決になりつつある」との認識から、「すべての国民を対象にした対話と共同」、「民主的改革の国民的多数派の結集」が謳（うた）われている。

その最大のポイントが「党と国民との結びつき方」で、①「紋切り型」から「対話型」への活動の改善、②議員は地域住民と地方政治と国政を結ぶ「架け橋」、③労組内での活動強化等がきわめて具体的に説かれる。「ふつつの党」がめざされているといつてよいだろう。

それをもつともよく示すのが第二章冒頭の「（日本の政治の根本的転換は）すぐに社会主義の日本にすすむことではなく、資本主義の枠内で、国民が平和で、豊かで、自由な、人間らしい生活をおくれる日本——『国民こそ主人公』の民主主義日本への転換である」と、社会主義を当面の政治課題から外していることである。

「民主主義日本への転換」とは何か。「三つの根本的転換」が強調される。①日米安保

条約をなくし、アジアと世界の平和に貢献する日本、②「ルールなき資本主義」をただし、国民生活最優先の経済発展、③憲法改悪を阻止し、民主主義が花ひらく、人間尊重の日本への「転換」である、と。

「民族自決」、「資本主義の改革」、「護憲・民主主義」の日本ということらしい。ここで興味あるのは、現代の資本主義について、「ルールなき資本主義」との新たな規定づけがおこなわれていることだ。資本主義に「ルール」などがあるのだろうか。競争、競争、競争が資本主義の「ルール」だ。この「資本主義観」から現代の共産党の思想があるのは興味深い。

共産党にとって今いちばん深刻なことは、「民主連合政府実現」を訴えても「連合」の相手がないことであろう。だから「無党派との共闘・連合」が強調される。共産党が問われるのはいよいよこれからである。当面は第二一回党大会を注目することにしよう。

本当のたたかいはこれから

—「頑張れ国労・新得交流会」の報告—

JR採用差別にたいする闘いが、十年の節目を迎え重要局面に入った中で、北海道新得町で闘いに関わった支援者、本州に広域移動した組合員、再就職した仲間など道内外から約百人が集い、国労・国労闘争団を激励する交流会が行われました。これは国鉄清算事業団闘争に連帯する新得会議（松尾為男議長）・新得平和運動センター（広山輝男議長）などの実行委員会呼びかけによる「国鉄・JR闘争十年 守ろう憲法・労働基本権」「勝利解決へ！ 頑張れ国労・新得交流会」で八月二日、十勝管内新得町公民館で開かれました。冒頭に新得集会の模様や「JRに人権をー」などのビデオが上映されました。

主催者を代表して、松尾議長は、一九八五年結成の「国鉄の分割・民営化に反対する新得会議」から、「連帯する新得会議」の活動にふれ、「十年前、相手より一日長く闘うと誓った。東京地裁の和解勧告を受け止めると、本当の闘いは、これから。勝利解決へ支援と連帯を強固にしよう」と挨拶しました。

再選されたばかりの斉藤敏雄新得町長は「面期的な和解勧告が出された。これを足掛かりに一刻も早く全面解決されるように」と励ましました。

連帯する会の山下俊幸事務局長は、東京地裁の五月二十八日の和解勧告に続く七月十七日の異例的な求釈明、「JRに責任あり！を別の角度から示せ」の判断が出された事は、「二百一億損害賠償訴訟の取り下げ以降、解決への模索が権力内部で、いろいろな形で行われている事の現れ。それは、闘争団の頑張りど全国の支援共闘の力によって到達したものだ。国労は一貫して話し合い解決を求めて来た。和解、だからと言って十年間の闘争団や家族の思いを無視する解決はありえない」と状況を分析、より一層の支援を訴えました。

国労北海道本部の伊藤整書記長は、「鉄道の一番目の職場が新得機関区。今は跡形もなく、寂しい思いもする」と話し、「道内十三闘争団と国労差別が続くJRで千名が支援に支えられて、頑張っている」と御札を述べました。

そして「JRは、五月二十八日の裁判所の意向を無視して回答すらしない。七月の東京地裁民事十九部は『理由づけ』の角度を変えて出せばJRに責任。会社の云うことは通りませんよ」との求釈明など裁判の状況を報告して、「本当の勝利集会をやるように」と

支援を訴えました。続いて、広山輝男議長が激励の金一封を国労帯広闘争団に贈呈、闘争団の樋口浩二事務局長は「皆さんと勝利を分かち合える日まで闘う」と御礼と決意を述べました。

乾杯に先立ち、出席者全員による黙とうを行い、百名以上の自殺者、他界した九名の闘争団員と家族、連帯する会呼びかけ人で元総評事務局長の岩井章さんなどに哀悼と勝利解決の報告を祈念しました。

続いて、新得平和運動センター青年婦人部による、JR採用差別と闘いの「構成詩」が発表されました。三好宏一北海道教育大学名誉教授から「狩勝トンネル闘争の伝統と国労魂を堅持し闘争を続けている皆様深く敬意を表し、大勝利の日を期待します」の激電が披露されました。元国労本部青年部長の松里福慈さんの熱いメッセージなど多くが「交流のしおり」に載せられました。（国鉄闘争に連帯する新得会議事務局次長 佐野周二）

森の時代Ⅱ蛇信仰からユダヤ・キリスト教へ

— 社会発展史、方向転換のために (五) —

キプロス島の興亡

ミケーネ文明期にギリシアをはじめとする地中海沿岸の後期青銅器社会は空前の発展を遂げた。しかし、これら地中海沿岸の都市国家は、どこも必需金属である青銅を十分につくだけの銅を持ち合わせていなかった。銅は、キプロス島に産出していた。キプロスでは高まる銅需要にこたえて、輸出用の銅生産に拍車がかかった。

紀元前一二〇〇年にピークをむかえたキプロスの銅産業は、しかし紀元前一〇五〇年には最後の窯を閉鎖することになった。面積わずか四七〇〇平方キロメートルの小さな島の松は一〇〇年もしないうちに伐りやすいところ、運搬し易いところでは伐り尽くされ、輸入材に依存するようになり、この輸入木材の高騰が製銅産業のとどめを刺した。このピッチを背景に鉄が注目されることになった。キプロス島で製錬していた銅鉱石には銅が四パーセント含まれていた。しかし、鉄は、四〇パーセントも含有されていたのである。

キプロスの製銅職人は、製銅の際に廃棄される「金くそ」Ⅱ産業廃棄物をハンマーでたたき、鉄を取り出した。この方法であれば、製錬に不可欠な木材は必要ない。木材の不足から解放されたとはいえ、労働集約的な作業であったため、キプロス島の金属生産高は大きく落ち込んだ。ピーク時から二五〇年の段階で、キプロス島の九〇パーセントの集落が見捨てられ、人口もしぼんでいったことがわかる。

産業の衰退に加えて、森林を失ったことによるたびたびの洪水や、土壌流出、植物相の変化に連動する動物相の変化、土砂の港への蓄積、調理や暖房に使う燃料の不足、こうしたことが、キプロス島の人々を流出させた。

しかし、この時期の冶金師たちが、鉄の取り出しに成功したことが、地中海地域と、ヨーロッパの他の地域での鉄器時代の幕明けの土台を築くことになったのである。話は再びミケーネに戻るがミケーネ社会が森林破壊にともなう土壌の劣化によって衰退しつつあった紀元前一二〇〇年頃、突然、北方からドリア人が侵入してきた。この時から数百年間、何の文献資料も出てこない「暗黒社会」が続く。ドリア人がなぜ南進してきたのかはわ

からない。これが、これまで教えられてきた歴史記述である。

自然科学の「革命」のなかで

しかし、現在では、ドーリア人の大移動の原因が、気候の変動にともなうものであったことが明らかとなっている。

花粉分析からは、紀元前一二〇〇年を境にギリシアでは荒地性のヤグルマギク属から、湿地性のガマやカヤツリグサ属への転換がおこっており、気候が湿潤化したことがわかる。同時に酸素同位体比の分析からは、気候の寒冷化が導かれた。

酸素には、質量数の違う三種類の同位体 (isotope) がある。質量数16のものが最も多く九九・七六%を占める。次に質量数18のものが〇・二%、外に質量数17のものが〇・〇四%ある。この三種の安定同位体のうち、O16とO18は気温の変化によってシエアを変える。

温度が高いとO18が増え、低いと少なくなる。植物は、それが生きていた時の大気と水を取りこんで固定しているから、植物遺体や樹木の年輪のセルロースの中に含まれるO18とO16の比を調べることで、過去の気温変動がわかる。紀元前一二〇〇年を境に、年平均気温にして二・三度の低下があったとされているが、この気温低下は、ヨーロッパの氷河の前進によっても、また太陽黒点数が減少し、太陽活動が不活発であったことなどからも傍証されている。

紀元前一二〇〇年頃の寒冷化は、北緯三五度以北のギリシャやアナトリア地方を湿潤化した。逆に北緯三五度以南のイスラエルやエジプトでは乾燥化している。西アジアをおそったこの気候の寒冷化と乾燥化の中で、一神教がうみ出されていった。このことを東アジアと比較しながら見てみよう。

二つの蛇信仰

森とともに生きていた時代、人類は蛇を信仰していた。縄紋土器や土偶の頭には蛇を図像化した紋様がつけられていた。縄紋土器一面につけられた波状の紋様も蛇の図案化である。蛇信仰は縄紋中期、中部地方から関東地方にかけて発展した勝坂式土器文化圏で特に盛んとなる。

縄紋人にとって、蛇は神であった。この心性は、四半世紀前の我々の心性まではかすかに継続されていて、天井裏をけたたましい音をたてて走る鼠の後をザラザラとゆっくり追いかけているかに感じられるアオダイショウを指さして、「あれが家の主じゃ。あれがおつてくれる限り、火事にはならん」と、大人から子供への語り伝えがあったものである。

アメリカナイズされた現代の居住環境の中では、蛇とともにくらすといった心性も失いはじめている。

蛇を崇める心性は、神社にも残っている。神社の注連縄 (しめなわ) は、蛇の交合している姿である。蛇の交合は半日以上に及ぶ。そのエネルギーが生命、脱皮することから発想される生命の再生、マムシのように一撃で相手を倒す、おそろしい力を持った存在、そして何より形が男根に似ていること、こうしたことは蛇への畏怖と尊敬の念をひきおこし蛇をまつる信仰へとつながっていた。

ところが、弥生時代に入ると、蛇を殺す図が登場する。神戸市灘区の桜ヶ丘遺跡から出

土した銅鐸には、蛙の右足をくわえた蛇と、その蛇を追いかける棒を持った人間が描かれている。

蛇は神の座から転落し、逆に排除の対象となった。こうした蛇殺しの神話が登場してくるのは、縄紋人とは異なった価値観を持った人々がこの列島孤へ渡来したからだと考えられる。紀元前一二〇〇年頃の気候の寒冷化は西アジアだけでなく東アジアでも引き起こされている。

この寒冷化を契機として、北方や西方から中国の中原方面にむけた民族大移動がおこり、殷が建国、続いて紀元前一〇五〇年頃、西方から周が東進して殷を滅ぼし、紀元前七七〇年に周は北方から犬戎の侵略によって滅亡し、春秋・戦国の動乱期へと突入する。

この社会的動乱の中で、朝鮮半島を含む大陸側から押し出されたボート・ピールが新たな農耕作物をたずさえて渡来した、それが弥生人であり、縄紋人とは異なる蛇殺しの心性を持っていた人々ということになる。稲作のための森の開発は、森の神である蛇をおそれてはできなかったであろう。

しかし、東アジアでは蛇殺しは、一神教の誕生へと結びつかなかった。モンスーンの運ぶ雨は、大地をしめらせ、西アジアにおけるような森林破壊の徹底は避けられたからである。東アジアの文明は、森とともに存在した。

西アジアや地中海世界でも蛇は信仰されていた。ユーフラテス川上流のマリ遺跡から出土した五〇〇年前の土器には、注連縄と同じく交合する蛇の姿が描かれている。メソポタミア地方だけでなく、トルコ、ギリシア、イタリアなどの地中海世界は、蛇信仰のメッカであった。ギリシアのデルフォイには、黄金の三匹のからまりあう大蛇が聖杯を捧げている彫刻があった。アテネのパルテノン神殿にも、人間の頭を持った三匹の蛇がからみ合った神獣の彫刻がある。アテネ女神の像は右手に蛇の頭をした杖を持ち、左手で広げた衣の裾には蛇の頭がいつぱいいつぱいしている。トルコ西海岸のベルガモンには、医の神アスクレピオスの大病院跡が残っているが、その病院の玄関の柱には蛇が彫られている。

ミケーネ時代に一度破壊された森林は、人間活動の衰退していた「暗黒時代」の三〇〇年から四〇〇年の間に少し復活し、その森林資源を背景に、古典ギリシア時代が出現したのである。

そして、その森の中では、蛇もたくさん生息できた。しかし、文明の発展、木材消費の増大は、再び森林を破壊し、森の消滅とともに蛇もまた大地から姿を消した。

蛇信仰から天候信へ

紀元前一二〇〇年の気候の寒冷化は、北緯三五度以南の西アジア、地中海地域の乾燥化を伴った。そして、それまでの大地母神、蛇の目をしたイシュタル女神の信仰から、天候神パール男神への転化がひきおこされる。

シリア北西部では紀元前一五〇〇年頃から、天候神パールの信仰が盛んになっていたが、紀元前八八五年アッシリア王が戦勝を記念して建立した彫像では天候神は、左手に角のはえた蛇を握り、右手は斧を振り上げ、蛇を殺そうとしている。

これまでは、大地の恵みに頼って生きていけたが、気候の乾燥化の中で、大地の豊かさを支配するのは地下の蛇ではなく、天の嵐・雷であることに、つまり天候神であることに人々は気付き、信仰の対象を変えたのである。

天候神の信仰は、もともと牧畜民のものであったが、氣候の乾燥化によって草原は砂漠となり、農耕民の居住するオアシスや河畔に侵入、侵略する形で文化の混合が生じたのである。東アジアよりきびしい生存条件の中で、天候神の一神教が形成された。

バール神は中近東で広く信仰され、後のイスラム教の神アッラーへとつながってゆく。一方、ヘブライ人は、唯一絶対の天候神ヤハウエを信仰し、ユダヤ教、キリスト教へとつながっている。

もともと牧畜の民は、リーダーへの絶対服従によって再生産を可能としている。家畜の群れを、いつ、どこに連れてゆけばちょうど良い柔らかさの若草があるかを知っている者だけがリーダーとなる。もし、リーダーが判断を誤った場合には、集団によって殺害された。ヘブライ人がバール神信仰へ同化されてゆかなかったのは興味深い。紀元前一二三〇年頃、モーセに率いられてエジプトから脱出した時、シナイ山の天候神ヤハフェとかわした契約によって選ばれた民となり、イスラエルを建国したにもかかわらず、サウル、ダビデ、ソロモン王の後、北のイスラエルと南のユダに分裂し、北はアッシリアによって、南は新バビロニアのネブカドネザルによって滅亡させられ、ユダ王国の住民が約六〇年間「バビロン捕囚」として連行された。

この捕囚時代に唯一神とかわした契約の不履行を反省し、旧約聖書がつけられた。新バビロニアを打倒したペルシア王キュロスによって祖国への帰還を許された時、ユダヤ人の民族的な生活共同体として、政治から切り離された教団が形成されたのである。その後ローマの支配を受けた後、ユダヤ人の一部はヨーロッパへと移動する。イギリスから始まったと見られるユダヤ人排斥運動によって東へ東へと移り住むうち、ロシアに到し、そこで大量虐殺（ポグロム）を受けている。今世紀になって迫害の中でシオン山の下に再結集する運動が始まり、第二次大戦中火薬の原料となるアセトン発酵技術と引きかえにイギリスが与えた約束によって、戦争終了後、ユダヤ人の大量流入が始まり、今日のパレスチナ問題が生じている。この大量移住が始まる以前は、パレスチナ人とユダヤ人は仲良くくらしていた。まるでユーゴスラビアが内戦に突入する前のように。

(播磨 宏)

◇ 読者からのおたより ◇

読み易くなった 活字が大きくなって読みやすくなりました。

(朝霞・M)

編集部より みなさんからよくそう言われます。さらにご愛読を。

十年を振り返る 五・二八裁判長の「意見」から二ヶ月。我々の闘いはこれからが正念場。十年間の歳月が一人一人の気持ちに変化をもたらしてはいないか。十年前の二月一六日やあの日々をもう一度、一人の組合員、人間として振り返ってみよう。

(国労・T)

編集部より 第二段階の陣立てをみんなで論議し、勝つ体制をつくって。

暑さの中で 旭川もこのところ三十度前後の暑さつづき。新社会党総支部は一九日から月末まで「有事法制化阻止」のチラシを作成、市民に訴えている最中です。

(旭川・N)

編集部より 暑いんですってね。東京も同じ。ご健康を祈ります。

自前の党づくり進む 新社会党徳島県本部も七月一三日、第二回大会を迎えることになりました。旧社会党時代にはなかった自前の党づくりが徐々に進行中。

(徳島・F)

編集部より 何よりも意識改革が大事。じっくり進めて。

ここまで来た!? 国鉄闘争、やっとここまで来た!? しかし不安。これが組合員の気持ちです。不安除去へこれからの問われる闘いです。

(静岡・A)

編集部より 昨年末から六度北海道を旅しました。現地闘争団は「勝つ」気迫で一杯。拡大できそう 過日、坂牛哲郎さんの講演を聞きました。現状況を適確にとらえ、多国籍企業の動きを学習でき面白かった。貴誌は羅針盤。久しぶりに拡大できそう。

(茨城・S)

編集部より 坂牛さんの読書・勉学欲はすさまじい。我々も見習わなくっちゃ。もっと見本誌を 「通信」とりたいと思っていました。前とつたのですが取扱者が中止したためそのままに。こういう人、他にもまだいるはず。どんどん見本誌を。

(秋田・H)

編集部より 再購読ありがとうございます。仲間ご紹介いただければ嬉しい。

地裁に判決求めよう 五・二八和解勧告を受けたJ.R会社の代理人は不当にもその場で拒否をし、指定された期日には正式に回答をしませんでした。国労はこの間、和解に着けて要請してきましたが席に着かない以上、地裁に公正判決を求める闘いをすべきだと思います。敵のいやがること(清算事業団の不当な実態)を暴露し追いこんで、勝利を勝ち取るべきだと思います。

(北海道・K)

編集部より 闘争団の子ども達が次々と上京中。子ども達、大きく明るくなった。

ぜひ鹿児島に 国鉄分割民営化で永年住み慣れた鹿児島を離れ、東京の地に単身赴任すること八年三ヶ月。去る六月末日で退職前提休職に入ることになりました。三五年間働き続けた職場を去ることに一抹の寂しさを感じます。ぜひ鹿児島で再会を! (鹿児島・上床)

編集部より 鹿児島はしばらくごぶさたしています。行くゾー。その時よろしく。

はじめて沖繩へ 七月二六日から一週間程、機会に恵まれ沖繩へ行ってきました。心配された台風九号の進路がうまくはずれ、若干遅れたものの、さほどの影響もなく無事帰還。読谷村役場では、助役さん等のお話も聞かせて戴きました。憲法九条の碑が、庁舎前に建植されており、何よりも庁舎そのものが、米軍軍用地内に建設されてまだ日が浅いとのこと。軍事演習時は村長自ら率先し、抗議行動へ。当然、職員も同行し、庁舎は空になる。村民も理解の上で『今日は演習だから役場はいないネー』が日常会話だとのこと。初めて沖繩の地を踏ませて戴いた私には、驚くこと多々。勉強させられました。

(国労・S)

「おたより」ありがとうございます。早速でございしますが、先だつては「読者からのおたより」欄に拙い文を掲載していただき恐縮に存じます。つきましては、「掲載用」として送っていただきました通信は仲間が読みたいということでしたので今回も拡大誌として使わせてもらいました。長崎の取扱者であるM氏に連絡を取っておりますので、今後の二部の取り扱いはM氏にお願いしたいと思いますのでよろしくおねがい申し上げます。猛暑の折柄、健康には十分お気をつけお励み下さいませ。

(長崎・K子)

編集部より 私どもの「ミス」にもかかわらず、ご丁寧なお取り扱いに恐縮。感謝!。

M氏からも早速連絡を戴き一同喜んでいきます。私どもも全力をつくします。よろしく!

全国在宅ケア研究交流集会上に 第六回全国在宅ケア研究交流集会上が十月四、五日に神戸で開かれます。この集会上は神戸の福祉・医療・保健にかかわる専門家と市民で実行委員会を構成し、私たちの在宅介護ネットワークも主要メンバーとなって計画を推進しています。地元神戸で、いまの在宅福祉に関する様々な話題、課題、問題について総合的に学ぶことのできる絶好の機会です。お知り合いの方をお誘い下さって、大会を成功させるためにご協力下さるようお願いいたします。

(神戸・U)